

が天武帝を皇太子に立てたのは、寧ろ外に然るべき故があつたのである。信友が「御母帝の遺詔にや」と言つて輕々しく其好む所に引つけて説かなかつたのは、寧ろ彼の史家としての確さを示す。

近世史學史上、國學の斯の如き貢獻が、其後の

黎 軒 と 大 秦

藤 田 豊 八

史家にいかに appreciate され、又發展させられたかは別種の問題である。しかも思ふに、それは近時西洋史學の影響のもとに、漸次に開拓されむとする、國史の文化史觀や思想史觀の爲に先蹤としての意義を許さるべきものであらう。

一

黎軒といふ國名の見ゆるのはいふまでもなく史記の大宛傳が初である。即ちその安息條に

其西則條枝、北有奄蔡・黎軒、

といつて居る。これは張騫が第一次の西使、^(一)即ち

そが大月氏に使用して、見聞したところを武帝に覆命した安息條中の末段である。而して安息は大宛

傳に所謂「騫身所至者、大宛・大月氏・大夏・康居、而傳聞其旁大國五六、具爲天子言之」とある傳聞した大國の一で、従つて安息條記するところのもの

は皆之を傳聞に得たものである。又大宛傳には張騫第二次の西使、^(二)即ちそが烏孫に使した

以後の武帝西方遣使の情形を述べ、

初置酒泉郡、以通西北國、因益發使、抵安息・奄蔡・

黎軒・條支・身毒國

といひ、又た

初漢使至安息、安息王命將（將）二萬騎、迎於東界東界去王都數千里、行比至過數十城、人民相屬甚多、漢使還、而後發使、隨漢使來、觀漢廣大、以大鳥卵及黎軒、善眩人、獻於漢、

といつて居る。なほ大宛傳には「善眩」といふことにつきて、張騫第一次西使が還つて覆命せる條枝條中に

國、善眩、

といへば、黎軒に善眩人があつたと共に、條枝にも特にそが多かつたものと見ゆる。

漢書の西域傳はいふまでもなく、史記の大宛傳と、その後に得た材料に依り、兩者を綜合して書かれたものであるが、その安息條を見ると、その四至を説き「西與條支接」といへるは、大體大宛傳と同様だが「北與康居（接）」といひ、大宛傳に「北

有奄蔡黎軒」とあるを改めて居る。而して却て烏弋山離條に於て「西與犂軒・條支接」といつて居る。

いふまでもなく、犂軒は黎軒で同音異字である。而して漢書西域傳にはこの條に於て較、詳しく條支を説いて居るが、しかもその所謂犂軒について何等言及せるところがないのである。想ふに班固は烏弋山離が「西與犂軒・條支接」といふも、犂軒が何處に在るか、條支と所在に於て如何なる關係に在るかといふ點につきて、何等明確なる知識がなかつたものと見ゆる。といふのは漢書西域傳の康居條には

其康居西北可二千里、有奄蔡、控弦者十餘萬人、與康居同俗、臨大澤無崖、蓋北海云

といひ、史記大宛傳に較して、頗る詳に奄蔡を説いて居るにも拘らず、こゝにも犂軒については毫も言及して居ないのである。これは犂軒が烏弋山離の西に在るとする班固の見解からすれば、固よ

り當に然るべきであらうが、しかも烏弋山離條にも條支を較、詳しく説明しながら、犂靬につきて言及せるところがないのは何故であるか、その他漢書に犂靬に關して説けるところは、殆んど史記大宛傳の所傳の外に一步も出て居ないのであつて、即ち張騫傳に

初置酒泉郡、以通西北國、因益發使、抵安息、奄蔡、犂靬、條支、身毒國

といへる、史記大宛傳の文をそのまゝ襲用したのであり、又た西域傳安息國條に

武帝始遣使至安息、王令將將二萬騎、迎於東界、東
界去王都數千里、行比至過數十城、人民相屬、因發
使隨漢使者、來觀漢地、以大烏卵及犂靬眩人獻於
漢

といへるも、大宛傳の文を襲用して數字の加除を施したに過ぎないのである。(この文に依り、大宛傳は「命將二萬騎」とあるは將上に一將字を脱した

のであることが知れる)。之を要するに班固の條支・奄蔡に關する知識は頗る大宛傳の外に出て居るが、犂靬(黎軒)に關する知識は毫も大宛傳の外に出て居ないことが知れるのである。たゞ班固は安息を以て北・康居に接するとし、康居の西北二千里ばかりの處に、奄蔡があり、その附近に犂靬(黎軒)といふ國あるを聞かざるに於て、遂に之を條支と共に烏弋山離の西に移し、烏弋山離を以て「西與犂靬條支接」などいつたものと見ゆる。固より之を條支と同一方位に移したのは均しく「善眩」であつたなどの事情に因つたのであらう。

ところが漢書西域傳烏弋山離條に所謂「西與犂靬・條支接」といへる一句は、後世に非常の影響を及ぼして居る。いふまでもなく、前漢の時には漢人の條支(條枝)に抵つたものはなかつたやうで(武帝はこの國にも使を遣つたと傳へては居るが)後漢に入り、始めて例の甘英が班超の命を奉じて

條支に抵り西海を踏たのである。而して烏弋山離若くば安息と條支との間に犁軒（黎軒）といふが如き國のないことはこゝに明瞭となつたのである。

しかも漢書西域傳には烏弋山離は西・犁軒・條支と接すといつて居る。従つて犁軒は必ず之を條支の西に求めなくてはならないこととなつたのである。而して當時條支の西に大秦といふ國のあることが

知られ、甘英は實に大秦に到らんとして條支に抵つたのである。かくて後世の史家に依り、大秦は即ち犁軒（黎軒）だといふ説が唱へらるゝに至つたのである。この説は固より甘英の實際に聞いたのでないことは、後漢書西域傳に甘英の事を記し、そが大秦に使したとはいつて居るが、そが即ち犁軒だなどとはいつてない。由來漢人が大秦といふ名を知つたのは班超の西域經略の時に始まつたやうで、當時その國に犁軒などいふ名があつたなら別に之を大秦といふ筈はないのである。史家が特

に大秦は即ち犁軒であると説明して居るのは、當時班超甘英等の聞知したのは大秦といふ國名であつて犁軒といふ國名でなかつたといふ何よりの證據である。而して史家が大秦を犁軒だといふのはさきに舉げた漢書西域傳烏弋山離條の文に依つたのに相違なく、この文に依れば實際さういはなくてはならないこととなるのである。

然らば大秦が即ち犁軒（黎軒）だといふのは誰から始まつたかといふに、之を確定することは、今のところ困難である、しかも吾人の知り得る限りに於ては、この説は三國時代から始まつたやうである。即ち魏の魚豢の魏略に

大秦一號犁軒、在安息條之西、大海之西、其國在海

西、故俗謂之海西

(三) といひ、吳の謝承の後漢書にも

大秦一名犁鞞、在西海之西

(四) といひ、又た晉の司馬彪の續漢書にも

大秦國名犁鞬、在西海之西

(五)

といつて居るといふが、こゝには明に「名」字の上

に「一」字を脱し「犁」字の下に鞬字を衍して居る。

劉宋の范曄の後漢書西域傳に「大秦國一名犁鞬、以在海西、亦云海西國」といへるのは此等の所傳に依つたに過ぎないのである。而して近世の學者も皆な此等の所傳を無條件に承認し、大秦問題の研究を以てその名を成した Hirth 氏の如き、犁鞬(犁鞬)を以て古代に於て紅海海頭の諸港に通じ、東西貿易の要衝に當れる希臘人の Petra(羅馬人はその四周の地方を Arabia Petraea と呼んだ)に擬し、その土名 Rskem 若くは Rekem (Rokom, Arekeme, Ar Kem) の對音と視做して居る。しかもこの城市は Hirth のいへるが如く、西紀一二世紀に於て商業殷盛の場所であつたに相違なからうが、しかも張騫が黎軒(犁鞬・犁軒)の名を聞いたのは、そが大月氏が大夏かに在つた時に相違なく

さすればそれは元光六年(西紀前一二九)か、元朔元年(西紀前一二八)の頃でなくてはならない。即ち西紀前二世紀の頃、この城市が Oms 流域に國せる大月氏若くは大夏の邊まで、有名の都市として聞えたか如何かは疑問である。特に Hirth 氏の精核を以てして、軒・軒・鞬を以て Kem, Kam, Komを表したといふのは不思議である。いふまでもなく軒・軒・鞬は上平の元韻であり、その final は *ndria* であつて *nd* ではない。又た我が白鳥博士は之を以て埃及の Nile 河口の古代最も有名であつた Alexandria に擬して居る。即ち「Alexander の名は甚だ長きが故に他國人は種々に省略して之を呼んで居る。例せば Pali 語で書かれたる Milinda Panha には Alasanda とつひ波斯亞剌伯人は Iskander とつひ Alexandria を Skanderia とつひ、匈牙利語では Sandor とつひ、Alexandria を Sandoria とつひ、阿輸迦王の碑文には Alexander を Alisau-

nari とかいて居る。因つて考ふるに漢史の黎軒は (A)-lek(San (dria) の訛れるものであらう」といつて居る。⁽⁷⁾而してこの説は遙かに後れて Pelliot 氏も亦た之を爲し、氏はなほ Alexandria の Jongleus 及び Jongleuse の有名であつて、それが西紀二世紀の初に於て漢廷に貢せられたといふ後漢書の紀事に依り一層この説を確めんとして居らるゝ。⁽⁸⁾しかも白鳥博士が Alexander, Alexandria の種々に轉訛した例證から視ても x(ks) の s 音を全く失つたものは一もない。従つて Lekān (d) となつて居る實例はないのである。又た埃及の Jongleus, Jongleuse が後世は兎も角西紀前二世紀頃しかく有名であつたか否かも不明である。しかも此等はなほ枝葉の問題である。此等の學者は何が故に黎軒の名を始めて漢人の間に傳へた張騫の所傳を不問に附し、張騫の所傳以外この國に關して何等の新しき知識もなき班固以下の所傳を確信して毫も

疑ふところがないのであるか。これ予輩の怪訝に堪えないところである。張騫の所傳はさきに已に述べた如くそのまゝ史記の大宛傳に傳へられて居る。さすがに張騫の親しく見聞しただけであつて、その所傳には殆ど誤謬と想はるゝものはないのである。而して大宛傳にはさきに已に舉げた如く、その安息條に「其西則條枝、北有奄蔡黎軒」といつて居るではないか。奄蔡は Hith のいへる如く Aorsi の對音と視て不都合はないやうで、當時裏海附近に遊牧して居た民族である。黎軒が安息の北に在つて之と併稱せらるゝとすると、それをも亦裏海附近若くはそれと甚だ相隔らざる地方に求むるのが至當である。Petra としても Alexandria としても、當時如何に方向が曖昧であつたとするもなほ之を安息の北とはいひ得ないであらう。たゞ安息の北に黎軒といふやうな國が、張騫第一次西使の當時なかつたとせば、之をその西に移すも已

むを得ないだらう。班固は多分、かゝる國がないと信じたから、眩人を以て之と關係のある條支と共に漠然烏弋山離の西に置いたのであらう。しかもその内容について何等加ふところがないところから視ると、史記特に張騫の所傳なるが故にその名を擧げたのみで、その所在に關しても別に信ずるところがあつたのではないやうである。然らば張騫の傳ふる安息の北に在るといふ黎軒は何國若くは何民族を謂つたのであるか、班固の良直にしてしかも之を烏弋山離の西に移さざるを得なかつたのは何故であるか、本篇の目的はこの歴史上の千古の懸案を解決せんと試むるに在る。

二

Zoroaster 教の經典 Yasna (xix, 18) に首長の種類を説き

首長 (ratu) は何何か。家のそれ (umantya) 、邑のそれ (wisia) 、族のそれ (zafnuma) 、國のそれ (dajnuma) 、及

び Zarathustra の Ragha の外のついでに第五として Zarathushtra (じある)。Zarathushtra の Ragha には四首長がある。その首長は何何か。家のそれ、村のそれ、族のそれ、及び第四として Zarathushtra (である)。

(九) といつて居る。この一章の意は Ragha 以外の地方に於ては、首長に五あり、政務上の國君の外に精神上的の首長として Zarathushtra の代表たる高僧があるが Ragha では精神上的の首長たる高僧が、即ち政務上の首長であるが故に首長は四あるのみだといふのである。換言すれば Ragha は Zoroaster 教の宗教的國家であつて、政教共に此教の高僧の統ぶるところだといふのである。この解釋はこの教を研究する者の一般に承認せるものであつて、予輩は之に従つたまでである。なほ Verdad, (1, 16) に

國土の第十二の最善なるものとして Ahuramazda であ

る予は、三種類と共に Raghā を造つた…………

といひ、これが Pahlavi 語の Ventidad (1, 16) には、

予、Atharnazd である予の完全に造つた處所及び地方は Atarōpātākān の三種類の Rak であつた…………

となり、之に注して「或はいふ(Rak)は Rāi で、三種類とは僧侶・武士・農夫の有徳にしてそれに屬することであると」といつて居る。⁽¹⁰⁾ されば Rak 即ち Raghā には僧侶の外、別に國君といふものがないといふことになるのである。この Raghā は Pahlavi Vendidad に Rāi と注せる如く、通例希臘羅馬の古典に見ゆる古代 Media 地方の東端に在つた有名な Rhaḡā, Rhages とせられ、その名稱は後に Rāi, Rēi と訛し、この名を有する遺址が今もなほ Jehnān の南約三英里の處に在るといふのである。⁽¹¹⁾ いふまでもなく Rhaḡā の名であると共に地方の名で、希臘羅馬の古典には、地方の名としては之を

Rhagiana とつて居る。而して Raghā (Rhaḡā) に關して Zoroaster の經典にいへるところのものを、歴史的事實の上から、證明せんと試みたは實に Spiegel 氏が始である。氏は先づさきに擧げた Yasna, Vendidad の文を引き、その内容から視てこの教の僧侶 Athravans を一個の團結せる階級と考ふるを至當とし、彼等は Media から外に延び、一個の主僧の下に立ち、その主僧は Raghā に於て單にその法座を有したのみならず、兼て精神上の獨立せる君主として統治して居たに相違なからうと説き、進んで此教の經典以外に、かゝる狀態を證明せるものとして Yāqet の所傳を引き Raghā に近き城砦なる Ustunivend の大 magi (Masmogan, Mas-i-mogan) の回教兵に攻圍せられ、その二女が教王 Mahdi Kamen の後宮に致され、その一女は教王 Mansur の母となつたことを説き、更に之を助くる所傳として Ammianus Marcellinus の

magi に關する紀事を舉げ、その巢窟が Media に在り、彼等はその固の法律に従はなくてはならなかつたといへるを重視し、即ち彼等は一般法律の範圍以外に在るを示すものと説き、氏は更にこの僧侶政治の更に古き痕迹を Artabazanes の國に求め、そが機を逸せざる投降に因りて Seleucic 朝の Antiochus III の攻撃を免れ得たるを説き、なほ Polybius の所傳に依り、その國が Alexander 大王の征服を免れたるを述べ Artabazanes を以て Alexander 大王當時の國王なる Atropates の子孫であつて、宗教的統治權を繼承したものであらうと斷じ、進んで Atropates の意義を釋ね、*‘Vom Feuer beschützte’* の意義を有する *Atropātā* が *Vistaga* の子の名として傳へられて居るが、しかも Atropates は古くは *athropātār* であつて、*‘Beschtitzer des Feuers’* の義であらうと説いて居る⁽¹¹⁾。この説は Spiegel の如き第一流の Iran 學者の所

説であるだけに相當に廣く世に行はれ、今なほ之に従ふものもあるやうだが、しかもこの説には Marquart 氏の有力なる反對がある。氏は Yarna, 及び Vendidad に見ゆる「Zarathustra の Ragha」の政治的社會的關係を Atropatene 國の創建者の名稱と結合し、この國を magi の法王國の一種と極印することを以て、實に Spiegel の “Ein höchst unglücklicher Gedanke” であるを評し、Yasna, Vendidad などの經典に見ゆる政治的社會的關係は吾人の歴史的所傳よりは遠く彼方に在る。然るをそを遙かに後世の紀錄に連結し、以て一種の歴史的繼續を修復せんとするの非なるを説き、次に Atropates は *athropātār* を解すべきではなく *ath-pātā* (*Vom Feuer beschützte*) を解すべきであることを證し、次に Pahlavi 語の Vendidad の注者が「*Aturpātākān* の Rak」をつくる説明し Rak は Ragha (Raj) に相違なからう、しかも注者が之を *Aturpātākān* に在る

とせるは Khosru I がその版圖を四分せるを考慮の中に置き Raghna の在る北部一帯を一區と認めその中の主要なる地名 Arturpatakin で之を表はしたに過ぎないのであつて、その實古代に於て Ray (Raghna) が Artapatene と政治的に何等の關係なきのみならず、そは Artapatene 國の建設以後に於ても Seleucus 朝の王家に屬し、尋で Parthia に屬したのであると説き、又た Dumbāwand の Masmogān 朝に於て Raghna に於ける Zarathustra の宗教政治の殘存を視んとするの均しく不可であつて、この朝の成立の遙かに後世に在ることを論證して居る⁽¹¹¹⁾。實際 Artapatene は奇妙なる國家で、或は Spiegel 氏のいへるが如く Zarathustra の宗教的國家であつたかも知れない。しかも Polybius, Strabo などのこの國に關する所傳には、その然るべきを證するに足る何ものもない。又た Dumbāwand 山地に在つた Ustunāvend 城砦の Masmogān 即ち

大 magi の王朝は後世のもので之を「Zarathustra の Raghna」に擬することは固より不可である⁽¹¹⁴⁾。しかも Media の magi は、已に Herodotus の傳ふるところで Media の五種族の一として之を挙げ(1, 101)その占夢の事を記し(1, 107-108)又たそが祭祀に預ることを説き、犠牲の準備の已に整ふや、magi の一人が立ちて神神の起源に關する頌を歌ふを述べ、又た Magi の一人も列することなくして犠牲を供するも、彼等波斯人の適法としないところであると傳へ(1, 133)特に波斯人の風俗を説き人屍曝露の事に及び「予は確實を以て Magi がそを行ふを知る、何となれば彼等は公然之を行ふからである」といひ、又た

Magi はあらゆる他の人、特に埃及の僧侶と頗る相異なる。後者は犠牲に供するもの、外、生を有する何ものをも殺さぬことを宗教の條項として守つて居るが、magi は人及び犬の外、自ら手を下してあらゆるもの

を殺す。而して彼等は蟻・蛇及びその他の爬蟲及び鳥類を殺したとき、善を行つたを考へて居る。而してこの習慣に關して、それが最初より存じた通りに守つて居る。

といつて居る(1, 140)されば西紀前五世紀の頃に於ても Magi の巢窟は Media で、而して他の波斯人とは一種特異の風俗習慣を保持して居たものと見ゆる。Herodotus が之を一の種族 *Ethne* と視たのは之が爲めであらう。而して magi が Media を巢窟とし、一種特異の風俗習慣を保持して、遙かに紀元後第四世紀の頃に及んだことは、Amnians Marcellinus 所傳に依りて毫も疑ふべきところがないのである。いふまでもなく Amnians Marcellinus は西紀第四紀の人で、羅馬の軍に従ひて身親ら波斯に入り、従つて東方の事情には精通して居たに相違なく、その著せる羅馬史(西紀九六 Nerva の即位から、同三七八 Valens の死

迄二百八十二年の事實を含む)は Gibbon も之を稱賛せる程で、その Magi に關する所傳の如き、充分に信用するに足る價值あるものである。されば Magi に Media 地方に於つて Achaemenidae, Arsacidae を通じ、その主權の下に、固有の風俗習慣を保持し、他の人民とは一種別様のものと見做されて居ただけは殆ど疑ふの餘地のないところである。たゞその中心は Media の何處であつたか、予輩の知る限りに於て、西方の古典にはこの事に關して明確な所傳がないのである。しかも Yasna, Vendidad 特に Pahlavi 語の Vendidad の注に依るゝ、それは Ragha (Rahgii) といふ、たとへ實際の上に於て Ragha (Rahgii) でないとするもの、その經典を信奉せる magi は之を Ragha (Rahgii) であると思つて居たに相違ないのである。而して Ragha (Rahgii) なる城市若くは地方は Parthia に於て北部である。かくて、予輩は張騫所傳の安息

「北有菴黎軒」といへる黎軒は即ち Ragna (Rhagi) の對音であつて、その國は magi の宗教的團體を謂つたに外あるまいと以爲うのである。いふまでもなく張騫は身親らこの國に到つたのではないのである。されば Media 地方に於て、周圍の民族と頗るその習俗を異にせる magi が Ragna (Rhagi) を中心とし、若くば之を中心と稱して居り、張騫が之を大月氏若くは大夏に於て傳聞したとすれば、之を Ragna (Rhagi) と稱する國と考へたとして、殆ど不思議はないのであつて、Herodotus が magi を一の種族と考へたのと、さまでの差異はないのである。若し夫れ張騫が之を當時此等地方に於て最も智識ありと稱せらるゝ magi から聞いたとせば、益々その然るを覺ゆるのである。而して Ragna (Rhagi) は Arrian, Strabo は Rhagi にかつて居るが Tobit には Rages がかつて、又た Judith には Ragan にかつて居る⁽¹⁴⁾。

ち Ragan はその音韻に於て、最も黎軒（黎軒・犁鞞）に相近いものがあるのである。

いふまでもなく Ragna (Rhagi) は獨立した國家ではない。それは Marquart 氏のいへるが如く、⁽¹⁵⁾ Syria の Seleucus 家に屬し、後には Parthia の Arsak 家に屬したに相違ない。而して之を黎軒と視ると、その痕迹は史記の大宛傳にも現はれて居るのである。即ち安息が黎軒の眩人を漢廷に獻したといふのがそれである。黎軒が安息の統治の下になく、若くはその附庸もなく、全く獨立した國家であつたとしたら、その眩人を安息が漢廷に獻したといふのは異なるもので、之をその所屬若くは附庸の國としたら、この事は最も穩當に解釋せらるゝのである。これ亦た黎軒が Ragna (Rhagi) であるといふ予輩の擬定の旁證となるものといひ得やう。

かく Ragna (Rhagi) はもう一の獨立した國家

ではない。従つて張騫以後此等地方の實情の漸く漢人の間に明なるに及んで、安息の北に奄蔡なる一の獨立した民族はあるが Raghna (Rlragi) といふ一の獨立した國家のないことの知られざる理由はない。これが史記大宛傳と漢書西域傳との所傳の相違を來すに至つた所以であつて、班固はその時代の知識を以て、安息の北に黎軒といふが如き獨立の國家なきを知り、已むなく均しく眩人の多い條支と連稱し、之を烏弋山離の西に移したものと見ゆる。かく視ると史記大宛傳に見ゆる張騫の所傳にも自ら理由があり、班固がその所傳に従はなかつたのにも亦た自ら理由があるのである。

たゞ予輩が黎軒(犁軒・犁鞞)を Raghna (Rlragi)

に擬するのは單に上に述べた如き理由のみではない。善眩人(眩人)に對する予輩の見解も、亦た大に予輩のこの擬定を資くるものがあるのである

次に之を略説しよう。

三

前に已に舉げた如く、史記大宛傳に依ると、條枝國は「善眩」だといひ、又た武帝の時、安息から大烏卵と共に黎軒の「善眩人」をいつて居る。而して當時に在つて、これは非常に珍らしかつたものと見え、外國の客を饗するにも「其善眩之工」を以てしたといふことである。この「善眩」につき魏略

には之を大秦條に繫け、
(俗多奇幻、口中出火、自縛自解、跳十二丸、巧妙(非常))

といひ、後漢書南蠻西南夷列傳に、安帝永寧元年に掸國王雍由(調)が使者を遣はし、樂及び幻人を獻したことを載せ、

幻人能變化、吐火、自支解、易牛馬頭、又善跳丸、數乃至千

といひ、且つ「自言、我海西人、海西即大秦也、掸國西南通大秦」といつて居る。又た顔師古は漢

書張騫傳の犁軒眩人（史記大宛傳の黎軒善眩人）に注して

眩與幻同、即今吞刀・吐火・種瓜・種樹・屠人・截馬之術・皆是也、本從西域來

といつて居る。近時に至り Hirth 氏は此等の眩人即ち幻人を *Jugglers* と譯し、學者概ね之に従ひ、Peliot 氏の如き、さきに已にいつた如く之を以て

黎軒の Alexandria たる一證とさへして居る。後漢時代に始めて漢人に知られた所謂大秦が、埃及若くば埃及を含める羅馬東方の屬領なることは、殆ど異論のないところであらう。しかも張騫西使時代即ち西紀前二世紀の後半の黎軒は張騫の覆命に依ると、安息の北に在るといひ予輩は之を *maçî* の本據、若くばその本據と稱する *Ragha* (*Rhagî*) に擬定せんとするは、上に説いた通りである。従つて予輩は史記の所謂善眩人、漢書の所謂眩人、魏略・後漢書の幻人を *magi* 若くばその術を學んだ

ものと解せんとするものである。而して黎軒（犁軒・犁鞞）に眩人即ち幻人があり、眩人即ち幻人が *magi* 若くばその術を學んだものであるといふことは、黎軒（犁軒・犁鞞）が即ち *Ragha* (*Rhagî*) であるといふ一證となるのである。さて後漢の張衡の西京賦に

奇幻儵忽、易貌分形、吞刀吐火、雲霧杳冥

と見え、李善は西京雜記に見ゆる東海黃公の立どころに雲霧を興すを引き、「雲霧杳冥」を解して居るが、吞刀吐火は西方傳來のものに相違あるまい又た晋書（卷九四）夏統傳に

其從父敬寧祠先人、迎女巫章丹・陳珠二人、並有國色、莊服甚麗、善歌舞、又能隱形隱影、甲夜之初、撞鐘擊鼓、間以絲竹、丹珠乃拔刀破舌、吞刀吐火、雲霧杳冥、流光電發……

といつて居るが、この文は夏仲御別傳から採つたのである。こゝに「吞刀吐火、雲霧杳冥」といつ

て居るのは西京賦と同一で、均しく西方傳來のものであらうと想はるゝが、しかも之を行つたものは巫覡の類であつたやうである。又た唐の道宣の法苑珠林(卷六一)に之と相似たことを載せ、

晋永嘉中、有天竺胡人、來渡江南、其人有幻術、能斷舌、續筋、吐火、所在人士、聚共觀試、其將斷舌、先吐以示賓客、然後刀截、血流覆地、乃取置器中、傳以示人、視之、舌頭牢固猶在、既而還取合續之、有頃、坐以見人、舌則如故、不知其實斷不也

といひ、なほ絹布を取り、人をして各々一頭を取らしめ、之を剪斷し、兩段を取り合して之を祝せば、また連續して故の如く一體となり、又た書紙及び繩縷の屬を取りて火中に投じ、その燒燃了盡の後、乃ち灰中から之を擧ぐれば、さきの物であるなどの術を行つたことを傳へて居る。予輩は道宣が之を何書から採つたかを知らないが、太平廣記にも法苑珠林から之を引いて居るところから視

れば、宋初已にその原典は失はれて居たものと見ゆる、しかも架空の事とも想へないから、唐時なほかゝる晋時の記録があつたのであらう。この所傳及びさきに擧げた夏仲御別傳に傳ふところなどから推すと、後漢安帝永寧元年に擇國使者と共に來たといふ幻人も殆ど同類のものらしい、而して此等は印度若くはその附近から來た幻人であるが、又は西北地方から來た幻人もあつたのである。即ち法苑珠林(卷六一)に崔鴻の十六國春秋北涼錄を引き

元始十四年七月、西域貢吞刀嚼火祕幻奇伎、
といつて居る。(嚼は殆ど噴の譌であらう。これは固より大秦からではないやうで、北魏書西域傳悅盤條にも

眞君九年、遣使朝獻、並送幻人、稱能割人喉脉、令斷擊人頭、令骨折、皆血出、或數升或盈斗、以草藥內其口中、令嚼咽之、須臾、血止、養瘡一月復常

又無痕癰、世祖疑其虛、乃取死罪因試之、皆驗、云中國諸名山、皆有此草、乃使人受其術、而厚遇之、又言、其國有大術者、黿歸來抄掠、術人能作霖雨・狂風・及行瘴、黿凍死漂亡者・十二三

といつて居るので想像することが出來やう。こゝには「吞刀吐火」といふことはないが、それよりは一層危険の幻術である。而してこの幻人を貢し、及び大術者があるといふ悦般は或は之を西史の Avat だらうなといふ學者もあるが、しかもその所在は極めて曖昧で、北魏書には實に

悦般國在烏孫西北……其先匈奴北單于之部落也

爲漢車騎將軍寶憲所逐、北單于度金微山、西走康居、其羸弱不能去者、住龜茲北、地方數千里、衆可二十餘萬、涼州人猶謂之單于王、其風俗言語與高車同、

而其人清潔於胡、俗剪髮齊眉、以醢酬塗之、昱昱然光澤、日三澡漱、然後飲食、其南界有大山、山傍石皆礫、流地數千里、乃凝堅、人取爲藥、卽石流黃也

といひ、所謂悦般といふ國が、烏孫の西北に在る

のやら、龜茲の北に在るのやら不明で「烏孫の西北」と「龜茲の北」とを同視することの出來ないことはいふ迄もない。しかも「其南界有大山」は殆ど龜茲の北に在る白山を謂へるに相違なく即ち隋西域圖に「白山一名阿羯山」といひ、唐書西域傳龜茲條に「北倚阿羯田山、亦名白山」といへるそれで、隋西域圖にも「常有火及煙、卽是出彌沙之處」といひ、唐書にも「常有火」といつて居る。されば悦般國の所在は龜茲の北で、龜茲とは白山を隔てゝ界相接し、その人民は突厥種に相違あるまい。しかるに北魏書には何が故に又たその國を「在烏孫西北」などいつたのであらう。予輩はこの國から來た使者の本國が、この國より更に西方に在つたから、かゝる錯誤を生じたのであらうと思ふ。而して「俗剪髮齊眉、以醢酬塗之、昱昱然光澤日三澡漱、然後飲食」といへるも、使者として來

たものゝ風俗で、それは殆んど龜茲の北に王廷を有した突厥人中の *magi* ではないかと思はれ、悦般といふ名稱も波斯語で僧侶の義を有する *Athava*, *Athavan* の音譯でないかと想はるゝのである。而して中國名山皆な此草ありといへる所謂草藥は殆んど彼等が神祕の力を有すると信ずる *Haoma* (印度人の *Soma*) でないかと想はるゝのである。といふのは時はやゝ後るゝが、唐初伊州(哈密)から來朝した祇主の行へるところは、悦般の使者の行うたところと極めて相似て居るからである。即ち近年 *Seia* 氏によりて敦煌千佛洞から持ち還られた地理書の斷片に伊州柔遠縣の祇廟を説き

祇廟中有素書形像無數、有祇主翟槃陀者、高昌未破以前、槃陀因入朝至京師、即下祇神、因以利刀刺腹、左右通過、出腹外、截棄其餘、以髮繫其本、手執刀兩頭、高下絞轉、說國家所舉、百事皆順天心、神靈助、無不徵驗、神沒之後、僮仆而倒、氣息奄、即平

復如舊、有司奏聞、制授游擊將軍、
といつて居る。而して之と同様のことが、唐の張鷟の朝野僉載にも見えて居る。即ち

唐河南府立德坊、及南市西坊、皆有胡妖神廟、每歲商胡祈禱、烹猪殺羊、琵琶鼓笛、酣歌醉舞、詩神之後、募一胡爲妖主、看者施錢、並與之、其妖主取一橫刀、利同霜雪、吹毛不過、以刀刺腹、刀出於背、仍亂擾腸肚流血、食頃、噴水呪之、平復如故、此蓋西域之幻法也、
といつて居る。(二二)に妖字は明に祇の譌である而して此等の例に依れば、幻術を行ふは祇廟に於ける常例であつたやうである。なほ朝野僉載には梁州に於ける祇主の事を傳へ

唐梁州妖神祠、至祈禱旦、妖主以利鐵、從額上釘之、直洞腋下、即出門、身輕若飛、須臾數百里、至西妖神前、舞一曲、即却至舊妖所、乃拔釘、一無所損、臥十餘日、平復如初、莫知其所以然也、
といつて居る。(二二)にも妖字は明に祇の譌である

が祈禱の日には、毎にかゝる幻術を行ふたものと見ゆる。予輩は北魏以來支那に入つた所謂祆教は獨逸土耳其番探險によりて得たる遺物なごから推して、殆んど摩尼教ではないかと想ふのであるが、そがたとへ摩尼教であつたとしても、その根幹をなすものは *Magi* の古教である。されば、かゝる幻術は古來 *Magi* の慣行したところに相違なく、従つて予輩は史記漢書に見ゆる所の黎軒(犁軒)の善眩人若くば眩人は *Magi* 若くば *Magi* の術を學んだものと解すべきであらうと以爲ふのである。特に史記大宛傳に條枝國を説いて「國善眩」といつて居る。*Magi* の本據は *magi* にもつた如く *Media* に在つたのであるが、*Zoroaster* 教を保護し、その宣傳に務めたのは *Achaemenidae* 朝であつて、この朝の根本は *Persis* (*Fars*) である。而して安息朝に至りても、この地方は殆んど化外に置かれ、たゞ聽摩するのみに過ぎなかつたことは *Strabo* の

所傳に依りて略ぼ疑はないのである。而して予輩は條枝(條支)を以てこの地方の海口 *Taohi* (亞刺伯人の *Tauhi*) の對音で、その國は即ち *Persis* 一帶の地方を指すと信ずるもので、白鳥博士の反對あるも、今なほこの所信に毫も動搖を感じないのである。(三) いふまでもなく、安息朝の王家は純然たる *Iran* 系ではなく、従つて *Iran* 人の國民的宗教たる *Zoroaster* 教に對しては、之を受け容れはして居たが、しかも熱心に之を獎勵することは、しなかつたのである。ある史家の如き、この事を以てこの朝滅亡の原因の一に數ふる程である。従つて當時に於て、この教の最も盛であつたのは自ら *Persis* 地方であつて *Strabo* の地理書の如き *magi* につきては専ら *Persis* 條下に之を述べて居る。かくて大宛傳に條枝を説いて「國善眩」といつた所にも、眩人を *magi* と視ると、極めて穩當に解釋せらるゝのである。而してこの傳に條枝につきて

「國善眩」といひながら、使を遣して漢に獻じた善眩人即ち眩人が黎軒(犂軒)のそれであつたのは、さきに已にいつた如く、黎軒(犂軒)即ち Regha (Ragha) がその統制の下にあつた事情などに因つたに相違なからう。

なほ後漢書及び法苑珠林に依ると、後漢及び晋時に支那に來つた幻人は印度からであるが、この幻人を Magi 若くは Magi の幻術を學んだものとするゝと容易に解釋し得らるゝのである。Zoroaster 教の本土中には印度の西北地方一帯が含まれて居るのである。のみならず、この教の行はれた痕迹は Ganga 流域にも見出すことが出来るのである。たとへば揮國使臣の伴ひ來つた幻人が「我海西人、海西即大秦也」といつたからとて、その所謂「大秦」が必ずしも埃及若くは羅馬東方の屬領と解せなければならぬといふ理由はない。そは大秦の意義を説明すれば、自ら明にならうと思ふが、特

に晋永嘉中の幻人は「天竺胡人」といひ、それが印度から來たこと略ぼ疑なく、而して單に之を「胡人」といひて胡僧といはざる、それを必ずしも僧と視る必要はないのである。

四

最後に予輩は大秦といふ名稱につきて一言を費の必要がある。魏略にはなほ

其俗、人長大平正、似中國人而胡服、自云、本中國一別也

といふのみで、「似中國人」から大秦といふ國名が出たときまではいつて居ないが、後漢書になると

其人民皆長大平正、有類中國、故謂之大秦

といつて居る。而して學者概ねこの說に従つて居るやうだが、古代の支那人が外國の名稱を傳ふるには、その國名を音譯するのが通例で、その國の性質を表はすやうな意義ある文字を以てその名稱とすることは殆どないといつてよい程である。況

んや文化の中心を以て自ら誇る支那人が秦に加ふる大を以てするが如き、到底あり得ないことである。大宛といひ大夏といひ、その大が大小の意義を有するものでないことは一般に認むるところである。たゞ大月氏の大は大小の意義を有する大であるが、しかもそは小月氏に對する大であつて、大秦の如く支那に對して他國を大といつたといふのとは趣が異なる。之を要するに大秦も大宛・大夏などの如く、或る外國の名稱に對する音譯と視るべく、予輩はこれが古代波斯語の

dasina Adj. (fem. nā)

に關係があらうと考ゆるのである。この語には 'recht, dexter' の義があると共に 'Westen' といふ義もあり、中世波斯語及び Pahlavi 語では *daēn* となつて居る。^(一四)而してこの語と大秦とは音韻に於て緊合するのみならず、魏略にこの國を「在安息條支之西、大海之西」といひ「其國在海西、故俗

謂之海西」といひ、後漢書に「以在海西、亦云海西國」といへる實際にも合ふのである。安息國は前漢の時には武帝の時に一たび使者の交通があつたのみで、漢書に傳ふところも略ぼ史記と同様だが（たゞ漢書に都城の名番兜 *Parthava* 城といふのを擧げて居るが、これのみが史記にない）後漢の時には章帝の章和元年（西紀八七）にこの國の使が來朝し、和帝の永元九年（西紀九七）には班超が甘英を遣つて大秦に使はし、この國の附庸なる條支に至つて歸つて居る。^(一五)而してこの班超遣使の時に始めて大秦といふ名が見えて居るところから視ると、大秦といふ名は安息人などから聞いたとすべきで、當時安息人はその西方の羅馬及びその屬領を大秦 *Dašina* と呼んで居たこと、吾人が歐洲諸國を泰西といふのと同様であつたものと見ゆる。

Dašina は *da* と *šina* ではなく古代印度語の *daśina*

と同語源に屬し、印度ではこの語が、波斯語の *dasina*, *dašin* と均しく「右」の義があると共に「南」の義となつて居る。これは多分川流の方向の差異から來たらしく東流せる *Ganges* の方向からいふと、右は南となり、南流せる *Euphrates-Tigris* の方向からいふと右は西となるのである。而して支那に於て大秦が往々にして印度の *Dakṣiṇa* (*Deccan*) と混同せらるゝのはこの兩語がもと同語源に屬しその間に極めて相類似するものがあるからであるかゝる事情も、亦た大秦が波斯語 *dašina*, *dašin* の對音であるといふことの斷案に多少の援助をなすものといひ得よう。

さきに予輩は後漢安帝永寧元年に憚國使者と共に來た幻人が「我海西人、海西卽大秦也」といつたからとて、その所謂「大秦」が必ずしも埃及若くば羅馬東方の屬領と解しななければならないといふ理由はないといふたのは、大秦がもと *dašina* (*dakṣiṇa*)

の音譯に過ぎないと考へらるゝからである。所謂憚國が今の緬甸に在つた國とすると、印度の南方 *Dakṣiṇa* は、その西南でもあり、また海西でもある。従つて「我海西人、海西卽大秦也」といへば「我は印度南方の國人なり」とも解せらるゝのである。而して予輩はかく解するを以て最も穩當であると信ずるのである。

後漢以來支那の史籍に傳へらるゝ大秦の紀事には、その國が極西に在るといふ關係から頗る傳說的の分子を含んで居る。甚だしきは之を理想的の天國とすら視んとするの傾がある。しかもその傳說的分子も概ね西方の傳説を傳へたのであつた支那史家の捏造ではない。こゝに序を以て一例を舉ぐると「或云其國西有弱水流沙、近西王母所居處、幾於日所入也」といひ、「其人皆長大平正」といふ如き、卽ちそれである。卽ち *Herodotus* (III, 114) には

千年線が没する日の方に傾くところに Ethiopia の境土が達し、そは人の住み得べき世界の極端である。ここに金・巨象・あらゆる種類の野生の樹木、黒檀を産しその人の身體は長大で、甚だ美はしく、且つ長壽である

といつて居る。これは世界の西南の極端、日の没する地方をいつたので、「其國西有弱水流沙近西王母所居處、幾於日所入」といふに均しく、その人の身體の長大にして甚だ美なるは「其人皆長大平正」といふと同じである。而してその地の極西その人の長壽であるといふことは西王母を連想せざるを得ないとする、支那史家の所傳は Herodotus の所傳と同一なる傳説を漢譯したに過ぎないといふことになるのである。

備考

- (一) 建元三年(西紀前一三八)出發、元朔三年(西紀前一二六)歸朝
(二) 元鼎元年(西紀前一二六)出發、同二年(西紀前一二五)歸

朝、同三年(西紀前一二四)死

- (三) 三國志卷三〇裴注所引
(四) 史記大宛傳安息條正義所引
(五) 文選張衡東京賦李善注所引
(六) Clima and the Roman Orient, pp. 160—161.
(七) 大秦國及び拂菻國に就きて「史學雜誌第十五編第四號二

五頁

- (八) Young Pao, 1915, pp. 690—691.
(九) Hugg 氏の譯文に依る、Essays on the Persis, pp. 188—189.
(一〇) Ibid. p. 362
(一一) Arian の Ambasis(III, 20)に依る、Rhagē は Caspian Gates から約一日程の處に在ることをなつて居る。若しこの所傳に誤がないとする、今の Rēi の遺址では頗る遠きに過ぐる。已に Rawlinson 氏の云へるが如く Caspian Gates から Rēi の遺址までは、到底二日以下の行程とすることは出来ない。従つて氏は Rhagē を以て Caspian Gates から約二十三英里の處に在る Kalēh Dri に擬して居る (Third Great Monarchy, pp. 272—273)。たゞ Arian の傳へる Rhagē は、さういふやうな Alexander 大王の時の Rhagē である。Rhagē が Strabo (Geography, IX, 1) は、Rhagē の名がこの地方に起つたのは地震からであると説き、又たこの城市が Nicator に依り

て建てられ、Europas を稱せられ Parthia 人には Arsacia と呼ばれたといひ、而して Caspian Gates の南約五〇〇 Stadia の處に在るやうに居る (Geography, XIII, 6)。五〇〇 Stadia を約五十七八英里と云ふ Strabo の傳ふ Rhaçia は略ぼ今の Rsi の遺址に當るのである。而して Rhaçia 城は Nicator (Seleucus) 即ち Seleucus I に依りて建てられたと云ふが、これは後建の Rhaçia と違つて Arrian の傳ふる Rhaçia とはその位地を異にするのである。

- (一) Eranische Alterthumskunde, III, pp. 564—565.
(二) Éranasch, pp. 122—124, 127—129.

- (一四) この王朝の居城 Ustunavend は Yagut は之を Ret(Ray) 州中に入れてあるが、また Tabaristan (Mazandaran) の州中に入るものもある。これが唐書西域傳波斯條の陀拔斯單(陀拔薩憐)である。

- (一五) Parthian Stations, tr. by Schoff, p. 29

- (一六) 魏志所引「非常」の二字はない。後漢書西域傳大秦條章懷注所引「の」の二字がある。

- (一七) China and the Roman Orient, pp. 35, 36.

- (一八) 北堂書鈔(卷一一二)倡優條、夏仲御別傳を引き「仲御徒父敬寧、祠祝祀先祖、有女巫章丹・陳珠二人、並有國色、乃拔刀破唇刀吐火、雲霧杳冥」といひ、(二)に徒は從の譌、破字の下に舌を脱して居る。又女巫章

陳二人、並有國色、能隱形匿影、眩惑人目、といつて居るので知ることが出来る。

- (一九) 杜佑通典卷一九一龜茲條所引
(二〇) 祇教の支那に入つたのは通例北魏時代を考へらるゝ。これがこの使などに關係があるやうに思はる。

- (二一) 太平廣記卷二八五幻術部所引
(二二) 同上

- (二三) 東洋學報第十三卷第二號條支國考

- (一四) Bartholomae Altiranische Wörter buch p. 793

- (二五) 後漢書卷一一八、西域傳安息條